

〔類聚名義抄七〕鹿靈 カマシ、

〔下學集上〕氣形懸羊カシ而懸カシ跡者也、

〔日本釋名中〕獸羚羊 にくは褥也、しとねの事を云、羚羊の皮、毛ふかくして褥とするによし、故に羚羊をにくと云、又かもし、と云、かもは氈の字けむしろ也、むかし毛むしろをかもと云、順和名に見えたり、にくの皮をけむしろにする故に、かもし、と云、

〔本朝食鑑十一〕獸麋羊 和名加萬之个

集解、麋羊、處處山中有之、狀似羊而青色、腹白帶微黃、毛粗兩角短、小彎曲深銳、夜以角懸樹枝、不著地而宿、晝亦如此、而棲性身輕捷躍、獨脚粘著于巖壁、山崖而垂、俱是遠害防難之備乎、若獵夫驅遂時逼之亦然、世人用皮造障泥、其價賤於熊虎皮、以其多也、采角入藥、以肉而食、謂能祛風強筋、其肉味甘軟、淺優於鹿猪、故世以嗜食、而謂羚羊身輕能飛、懸角棲木、其態比禽類、以無穢忌、最詣神祠、亦無害、然本邦有四足之穢、而不可犯之、若此之事、可尋祝巫之家、予未詳其理、爾

〔和漢三才圖會三十八〕獸麋羊 羚羊 麋羊 九尾羊 和名加萬之个 俗云爾久略○中

按麋羊似羊及鹿而灰青色、腹白微黃、眼略大也、於吉野山中捕之畜養、而不食穀肉等、未知常所好食者、試投諸草及菓子、止食榲葉、竹嫩葉、薊葉、而不多食、故難育、其屎亦如鹿屎、

〔百品考下〕麋羊 和名カシシニク略○中

郭璞爾雅註、麋羊似羊而大、其角圓銳、好在山崖間、

諸說紛紛タリ、爾雅及本草蘇恭陳藏器ノ説ニ據レバ、カモシ、ニ充ツル穩當トス、カモシ、ハ東北國ニ多シ、形羊ニ似テ微大ニシテ、毛色蒼黒ニシテ、至テ柔軟ナリ、首モ羊ニ同ジ、兩角駢生ジテ長サ四五寸許、細直ニシテ末下ニ曲ル、色黒シテ半ヨリ本ノ處ニ縮文多シ、末ハ細シテ鋭ナリ、角ノウラニスレタル痕アリ、此ハ夜山中樹枝、或ハ岩角ニ掛テ眠ル故ナリ、此皮敷物ニ用